

#子育て処方せん

小・中・高1年時に実施

福岡市立こども病院の医師が子どもの病気やその予防・治療法について説明する「#子育て処方せん」。今回は、全国の小・中・高校で行われている「学校心臓検診」について、循環器科長の倉岡彩子医師に聞いた。



倉岡彩子医師

学校心臓検診

学校心臓検診は学校保健安全法に基づき、小・中・高校の各1年時に行うと定められている。心臓の痛みや動悸を感じることはないかなどを尋ねる「問診」、手足と胸に電極をつけて心臓が規則正しく動いているかを確認する「心電図検査」、聴診器で心音の異常の有無などを調べる「内科検診」の三つを行う。

全員が受ける1次検診で何らかの異常が見つかる人の割合は3〜4%ほど。そうした児童・生徒は、2次、3次と検査を重ねていく。心臓の異常が確認されれば、状況に応じて、治療を行うこともある。緊急措置が必要でなければ、年1回程度の経過観察を求めている。

年齢とともに見つかりやすくなる心筋症などの病気もあるため、全員に毎年検査をするのが理想だが、費用対効果やマンパワーの面で、間隔が空くのは仕方ない。ただ、小学1年から中

学1年まで6年にわたって検査がなければ、心臓の重大な疾患の進行を見逃す恐れもある。最近では小学4年時に問診だけ実施する地域も増えている。

心臓の異常が見つかる

と、必要以上に運動を制限する例もみられるが、かえって体に悪く、子どもにとって大きなストレスにもなりうる。制限の必要がない子どもには、適切に運動の機会を与えることも学校心

1500g未満で生まれた赤ちゃんの命を救うため、別の母親から寄付された母乳「ドナーミルク」を利用する動きが九州・山口でも徐々に広がっている。1500g未満の赤ちゃんは消化器が未発達で粉ミルクをうまく消化できず、腸が壊死する病気になる恐れがある。こうしたリスクを防ぐためには母乳が必要になるが、早産の場合はホルモンバランスの影響で、母親が十分な量の母乳を出せない

ドナーミルク 早産の子救う

九州・山口では7県9施設

いケースなどがある。

ドナーミルクは、日本財団母乳バンク（東京）など2団体が運営。寄付された母乳を、都内の施設で細菌検査や低温殺菌処理して、冷凍保管する。1500g未満の乳児に対応できる地域・総合周産期母子医療センター115施設（4月25日現在）に送られ、新生児集中治療室（NICU）で赤ちゃんに提供される。九州・山口では7県9施設で使用できる。そのうちのひとつ、

ドナーミルク提供の流れ

- ドナー**
- 自分の子どもが飲む以上に母乳がでる人
 - 血液検査などを受けて登録
 - 搾乳した母乳（ドナーミルク）を冷凍して提供



- 母乳バンク**
- 低温殺菌し、細菌培養検査で無菌が確認されたドナーミルクを冷凍保管
 - 医師の要請に応じて、NICUへ発送



- 新生児集中治療室（NICU）**
- ドナーミルクを冷凍保管
 - 保護者の同意を得て、原則1500g未満で生まれた赤ちゃんへ提供



久留米大病院（福岡県久留米市）で昨年12月に1340gと995gの双子の娘を出産した佐賀県鳥栖市の女性（31）は2人分の母乳が出ずにドナーミルクを利用した。「たくさんさんの善意で娘たちの命を助けてもらい、心の苦しみも軽くなった。どこの病院でも利用できるよになってほしい」と話している。

「#子育て処方せん」へのご意見をお寄せください。社会部のメール（s-syakal@yomiuri.com）へお願いします。



インタビューの動画はQRコードを読み込んでください

受診データ、本人に還元課題

臓検診の重要な役割だ。近年、心臓検診を巡って医学会で課題となっているのは、小学1年の時から蓄積してきた受診データを本人にいかにか還元するか、ということだ。自分の心臓に何が起きている、何に気を付けるべきなのかを分かりやすい言葉で本人に伝えてあげる。できればデジタルデータとして個々人で保管できるようにし、高校を卒業した後も健康管理などに活用できるようにするのが望ましい。

（聞き手・大森祐輔）